
尾張町を支えた女たち その玖

店先の顔はゆったりとしながら奥では.....



目 次

はじめに	1
尾山神社の前を通るたびにお参りして	2
界限のごひいきで尾張町に店を	4
顔でゆったり、心はワヤクチャ	6
お客さんの喜ぶ顔のために	8
下職人さんを回る爺ちゃんの姿に	10
回り持ちの謡の稽古	13
泊まりがけの婚礼着付け	15
昭和劇場と夕方の店先の縁台	17
尾張町の子はやっぱり商売人	19
のれんの印を子供に託して	21
あとがき	24

はじめに

着物の帯というものは、ただやたらにきつく締めるだけのものではない。せわしない(急いだ)思いをせずに落ち着いて帯の下の方を、こうキュッと引き締めるようにして巻くのがコツ。上の方は見映えを考えて、きちんと揃えることは勿論。そうすれば、帯に妙なシワも出ないし、襟元も収まる。

何より、着ている人自身が楽にしていられる。帯の下側が締まっているので、腰から下がキリッとし、足捌きもスッキリする。襟元は、帯の下側でしっかり締めてあるから、ゆったりしていながら型崩れもせず見映えがする。帯の結び目が背骨の下を支えているので、姿勢もスッと真っ直ぐに伸びやかになる。

日頃、何気なく見ている着物姿も、こうしたツボを踏まえた着付けをするのとしらないのでは大違い。例え、外見(そとみ)は同じようでも、着ている人の気持が伸び伸びしているのと、窮屈に締め付けられているのとの差。時間がたてばたつ程、疲れの出具合、着ていることの思いにも違いが現れて来る。

商いも、「お客さんのために」という原点の意味をしっかりと押さえて置くのとそうでないのでは大違い。ただ、考えもなしに値段だけを安くするのは誰にでも出来ること。本当のお客さんのためにとは、後々までも安心して使って頂けるようにすることが第一で、その次に出来る限り経済的に便宜を図るために価格を勉強するのが筋道やと思いたい。

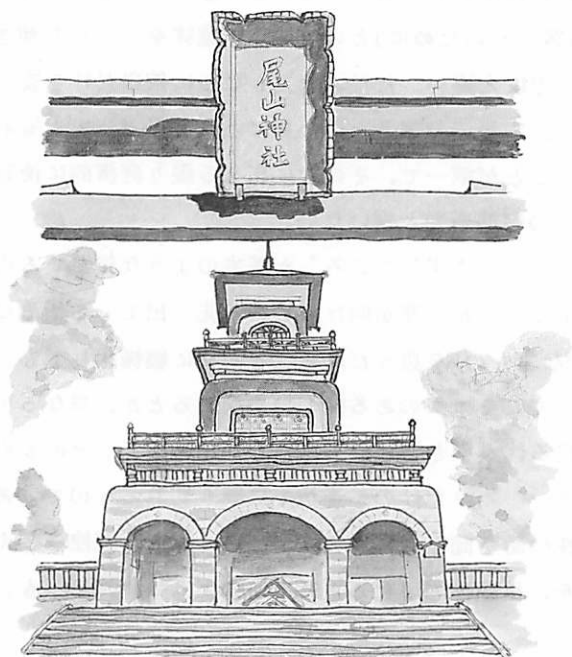
見掛けの形でなく、まず“ところ”が基本のような気がするのは、商人の立場からのエゴでしょうか。寒が明けるこの春先に出てくる新酒にしたって、酵母という生物(なまもの)を扱うだけに、どんなに機械化しても、最後は微妙な人の感性があってこそコクのある味わいが決まるとか。単なるデータでなく、酒蔵の長年に渡る代々引き継がれて来たものがあってこそそのもの。とてもコンピュータのオン・オフだけの二進法では割り切れるものではありません。

尾張町の女性の話を聞くというのは、まさにこの合理性を超えたところにある奥深いものを、私達に思い起こさせるかのようです。それも、普段の何気ない語りとして。

尾山神社の前を通るたびにお参りして

嬉し、楽しなんていう今の人の結婚と違って、私等のはつつましいもんやった。結婚するっちゃうのは、まず二人の生活と信用を世間様に認めてもらうのが、一等大事なこと。見目麗しい夢を追う先に、シッカリした毎日を持つことが出来るかどうか。もっというたら、私を連れ合いとしてくれる爺ちゃんが、独立して商いするための信用を増やすためだったかしら。

鶴来の町から出て来たばっかしの私。白山比咩神社やら、お寺さんがたくさんあった町で育ったせいか、神仏に囲まれるのが当たり前やった。逆に、近くに神仏がないと安心出来ない。目に見える所にあると、気持が晴れやかになるようになってた。そやさかい、有名な尾山神社の前を通るたびに、自然に手を合わせる事が習慣になってしまっていた。



あの美しい色とりどりのギヤマンのある山門は、近くに行くとすぐ目についたもの。階段を昇り、山門をくぐり抜けて拝殿に向かうと、慣れない町に来てからこっちのささいな悩み事も洗われるようやった。それに、“おやま”（かつて一向一揆の「おやま御坊」があったことにちなむ金沢の古い通称）の町に何んとなく根付くような気がしていたから。

15の歳から呉服の本店に丁稚奉公をしていた爺ちゃんに縁があったのも、お参りのお陰に違いない。とはいうても、私にしたって男物の仕立屋に4～5年行ってただけやし、爺ちゃんもやっとなんか住込から通いが出来る身になったばかりで、名ばかりの家があっただけ。それこそ湯呑み1つから始めて、何んにもない中からコツコツと家の中のものを揃える。もう無我夢中の毎日。

わけても、あの結婚した昭和12年の春は上海事変の直前で、二人で生活するのもそこそこに8月には兵隊に行かされる始末。やっとなんか落着けるかと思う間もなく、それからの3年間、ただ待つだけの毎日……。こんなんで、ちゃんと二人してこれからやって行けるんやろか。気弱になるたびに、尾山神社へ出掛けて、爺ちゃんが一日も早く元気で中国から帰って来てくれることを願うのが日課やった。

ようやく帰って来た年は、太平洋戦争が始まった翌年。まだ勝ち戦さの勢いがついているので、あっちでもこっちでも盛大に日の丸の旗が振られていた頃。この調子やと、せっかく帰って来たのに、いつまた戦地へ招集されるかも分からん。お国のことやから、ちゃんとご奉公して欲しい。と、思う反対に、死ぬかもしれない所へ行って欲しくない！こんな身勝手なことは、人様にも言えないし。

幸いというか、上海事変で大きなお勤めをして来た爺ちゃんには招集の声もすぐには掛からず、軍需工場へ行ったりしている内に終戦を迎えてしまう。本当は、1ヶ月前に赤紙の招集礼状が来て、ドキッとした。けれど、戦地へ出る前に除隊となってしまう、誰よりも早う帰って来てくれて、ほっとした。

せっかく、爺ちゃん名前の一文字を使って長男の名を付けたのに。もしものことがあったら、形見の名前になってしまうところやったと胸を撫で下ろした。

いつかは、この昭和17年に生まれの子に、私等の店を継がせるようにしてやる時までは、私等が元気で二人揃ってやりたいし。

界限のごひいきで尾張町に店を

あの世代の男の人ちゅうもんは、亭主関白を絵に描いたようなもの。頑固で、自分で「これっ」と思ったことは、全然曲げない。そのために、長年の付き合いのある人だろうがお構いなし。遠慮会釈なく喧嘩をしてしまい、ずっとソッポを向いたままになることもある。

爺ちゃん、相手の人のことも考えてあげて、自分だって商売してるんやから意固持にならんと、本心でなくてもいいから頭を下げたら。と、思うのは女の浅知恵かも知れない。けれど見事なほど、一旦正しいと思ったことは押し通す。あきれほどの頑固さ、こだわりが、不思議なことにごひいきを作ることもあるみたい。長年、連れ添った今となっては、却って今時の人の方が優し過ぎるように思えのは、私までが頑固さに染まってしまったのかしら。

「染め物・悉皆(しっかい)業」として“染”呉服店ののれんを掛けたのは、ようやく戦後の混乱も整理され出した昭和26年のこと。前の年には、浅野川の尾山倶楽部が北国第一劇場と名前を変えて映画館になったし。確か、武蔵大和ビルの上に北陸文化放送(今のMRO)が初めて声を出し、みんなが大きなラジオ機械に耳を傾けていたのを覚えとる。そうや、次の年からは商工パレードという形で、第一回の百万石祭りも始まったんやった。何しろ、急に世の中がせわしくなり出した頃。

前に勤めていたお店が瓢箪町にあって、駅前から武蔵・尾張町、そして浅野川界限にお客さんが多かった縁があったもんで、本格的に今の場所で店を開くことにしたわけ。

老舗の大店がずらりと並んで一番の賑わいを見せる尾張町の大通りでなくて、何でわざわざ横へ入った小路に……。そりゃ、ちょっと見には目立んように思うけど、着物を買うお客さんちゅうのは、商売をしていたり、自分で仕事を持っている人が多い。なかなか普通のお勤めをしている人には縁が薄かった時

勢やったし。



この頃のように、柄も仕立ても出来合いのものなんてなかった。それぞれ柄を見立て、染めからお世話していたので“染”呉服店と言われていたのやさかい。今流行のイージーオーダーとか、オーダーメイドなんて宣伝してても、私等とは手作りの程度が全然違う。

時間とお金を掛けて作るので、着物を買うお客さんの相手が限られて来るのは致し方のないこと。そんな手間暇を惜しまないお客さんに限って、あんまり人前では派手にお金を使わない。控え目にしていて、使う時はドンッ！と使うもんだから、目立たずに店に入れるように、ちょっと大通りの脇にすきするようにして店を構えさせてもらうた。

聞くとところによると、近頃は大通りの一本脇にさりげなく店を構える方が品が良いなんて流行っていると。似たようなことを、やっと考えるようになって

たなかね。

顔でゆったり、心はワヤクチャ

お爺さんは、ほとんど日がな一日、反物を持ってお客さんの所を歩き回るのが仕事。店番いうたら、私が要(かなめ)にならないかんことになってしまっている。

呉服屋の暖簾を出しているもんで、勿論のこと着物を着て店番をするわけ。それも、せかせかした様子を見せず、顔付きはゆったりとさせ、暇で暇でしようがないように振舞わないかん。これはこれで結構しんどいもの。

私の苦勞が分らん子供から、「そんなに毎日、暇そうにしてるんやったら店番なんか止めて町内の海水浴にでも行って来たら」と、言われる始末。あんたも、いつかお母さんの苦勞が分る時が来たら、そんなこと言えんようになるよ。と、ところの中で悪いながら一人くすくす笑うのをけげんに見る長男。

あんまりお客さんが来ないと、ちょっと奥へ入って洗濯でもしようか。それとも、火鉢の炭切りでもしようかと、手やら顔やらを真っ黒にしている時に限って、お客さんは来るもの。

「ごめん下さ〜い」

「こんにちは、奥さ〜ん。誰か居ませんか〜」

ほんとに、間が悪い。けれども、そんなことは言ってもらえない。

手早くとり繕って、顔中、愛想笑いしながら。

「あら、奥様いらっしゃいませ、今日はどんなものを……。今度入った新しい反物がありますから、すぐ持って参りますので、ちょっとお待ち下さい。」

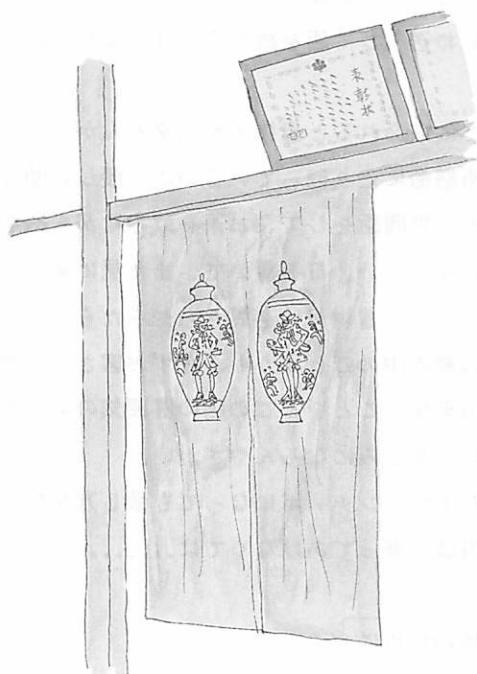
「いえ、どうせ私も何もすることがなかったもんですから、ご遠慮なさらず、どうぞゆっくり。」

なんて言いながら、心の中ではさっきの洗濯物はどうなったかしら。あの放り出したままの炭をそのままにして置けないし。と、気もそぞろ_____。

お客さんが反物の柄で迷っていると……。

「ちょっと。」

と、優雅に立ち上がり、何かついでのことのように奥に入る。お客さんから見えなくなった途端に、それこそ着物の裾を捲りあげ、袖をタスキで縛り付けて洗濯物の所に突進。手早く乾かすものは干し、一段落つける。炭は、切った分だけとりあえず横に積み置く。



そうしてから、またしずしずと店先に戻り……。

「奥様、お気に入りの柄かなんぞありまして。今度のは、私も気に入ったのがたくさんあるんですよ。ほら、肩に掛けて鏡台の前に立って見てご覧なさっては。」

たおやかに、ゆっくりと座りながら、新柄の反物を品定めする様子を仰ぎ見る。お客さんの側のおだやかで満足そうな笑顔とは裏腹に、お客さんから見えない側の背中に、どっと汗をかく思い。

とにかく、お客さん次第の店なので、奥はもうメチャメチャ。台所も、掃除

もハンチャボ(中途半端)のままになることがしょっちゅう。商売屋のオカッタン(おかみさん)なんかは、自分の店の仕事始めの前とか、店終いしてからでないとか来られんさかい。時間も、朝の6時頃だったり、夜うさり(夜遅く)の9時過ぎだったりする。中には、尾張町の昭和劇場の映画が終ってから来られると、10時を回ってからになる。笑顔でお相手をしてれば、1時間や2時間はすぐ。やっと、お客さんをお送りして店を締めるのは12時を過ぎてしまうこともあったわ。

でも、皆さんここに来られると息抜きが出来るんかしら。それぞれのお店では形振り構わず一所懸命に走り回っているのに、優しい顔立ちになって娘みたいにはしゃいでいる。世間話をして、お茶を飲みながら柄を見て、なかなか1回や2回で決まるもんでない。日を置いて、また見に来られたり。

ただ単に、品物としての着物だけを買うんやったら、あんなに時間を掛けるはずがない。自分の家の中のことよりも、まずお客さんの都合やわがままを第一にする。日頃、出来ないことをこの店の雰囲気の中で充分味わってもらえことが、そのまま私の楽しみになるんやさかい。

少しくらい、家ん中がハンチャボになっても致し方がない。そんなことより、もう一踏張り、ご相談に乗ってあげなくては.....

お客さんの喜ぶ顔のために

浅野川界限で、そんなオカッタン以外に着物を着るお客さんいうたら、主計(かずえ)町や東(ひがし)の茶屋街の女の人達やった。けど、めったに店先には姿を出さんかった。爺ちゃんが外回りの折に寄るもんで、あんまりどんなお客さんが居るか顔も知らんかったわね。それでも、夜のお仕事をしているだけに、お爺さんも相手のことを考えて、朝早く行くのはつつしんで、昼から行って、夕方早めにチョウツケル(仕事を済ませる)ことが多かった。

店に居るだけで外へも出ないのに、今日はどこへ行って来たの。と、聞かんでも、茶屋街へ商売に行った日は、だいたい分るもの。香の薫りがするとか、おしろいが、とか生臭いことやない。よっこいしょ、と大きな風呂敷を店先に

降ろすとすぐ、一日の注文やら、お客さんからの頼まれ事をしたためる。染めの具合や、柄の模様もいちいち手に取って確認する。そうした折の反物が、いつもより派手目やったりすると、は〜ん、と思ひ当たるさかい。

まだまだ着物が女の人の大事な外出着だったから、武蔵や橋場町に大きな呉服屋さんがあったりと、“おやま”の町の日抜き通りにはたくさんの店があった。また、ちょっとしたオシャレなものは、洋物店(洋品店)に揃っていたわね。今の有名なデパートなんか、最初の頃はみんな呉服か洋物を扱うてたくらいやから。

そやさかい、尾張町の洋物店で買い物をしまさるお客さんと、うちの店のお客さんが結構同じだったことが多かったもの。

「あら、この柄やったら、あそこの洋物店に良く似合う帯留があったから、帰りに寄って行こうかしら」なんてことも、しょっちゅう。

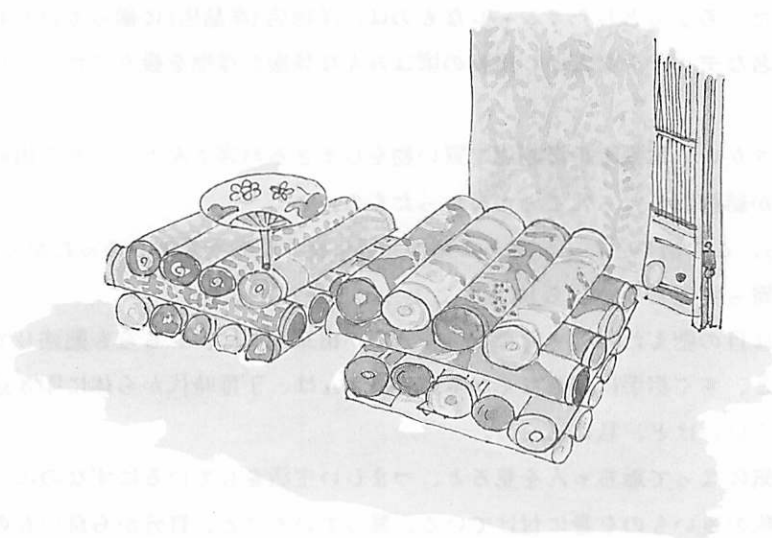
そんな目の肥えたお客さんに十分な対応が出来るには、こちらも勉強しておかないと、すぐ相手にされなくなる。お爺さんは、丁稚時代から体に叩き込んだるからいいけど、私は……。

その気になって爺ちゃんを見ると、つましい生活をしているはずなのに、案外に趣味の良いものを身に付けている。黙っているけど、自分から良いものを身近にしていないと、お客さんに対しても本当に良いものを見分けてあげられん。と、ということなのかしら。

“染”呉服店というのれんを掛けていると、作家さんに絵を描いてもらい、白生地の色を染め、お客さんの家の紋を書き、仕立てあげる。という、一通りのことをせなならん。ハンチャボな知識だけでは動まるもんでない。ひと頃は京都が絶対の時期が続いていたけれど、東京物も段々に出て来るようになって来たし。展示会なんかを開く時でも、そこいら辺の流行りというか、お客さんの好みも早く知らないかん。

ほとんど毎日、反物を持って外回りしている爺ちゃんには、買うてもらうことも大事。けど、これから先何に興味を持っているかを感じ取ることの方がもっと大事なこと。それでないと、大きなお金を掛けて、料亭なんかでただ着物を

並べていても、らちがあかない。お客さんの着たくなるような品揃えをすることが肝心。



だから、近頃は店と奥を使えるだけ使って、出来るだけたくさんの着物を置くようにしている。それだけ、私等の生活の場所が犠牲になるんやけど、仕方ないことかしらね。

私に出来ることは、せっかく来て頂いたお客さんの気を反らさないように、京柄や東京柄の新作図案が載った本等を見て、目を養っておくことが精一杯。理屈よりも、良いものを良いと感じ取る心を磨くことなんやけど、口で言うほど簡単なことでないことも、また確かやわ。

下職人さんを回る爺ちゃんの姿に

本当は、この店はお爺さんと私、他に通いと住込の子が一人ずつ。お手伝

いの女の子もいたかしら。こじんまりした店構えやったし、またそれだからこそお客さんの痒い処へ手が届くような対応が出来たのだと思う。この仕事は、若くてあんまし経験のない人には、ちょっと難しいし。

そんなに人手が入る仕事とも思えなかったわけ。実際初めのうちは、私の目の見える中にはそんなに人は居らなかった。ところが、出入りの職人さんの数が、半端な人数やないんで驚かされた。

今のように問屋さんが何もかもするようになって、出来上がった着物だけを展示会などで仕入れるのでない。私等が、いちいちお客さんの好みを聞いてあげ、こちらもいろんな知識でもって相談させてもらう。そうした中から決まったものを、それぞれの職人さんの所へ入って説明して作ってもらう。問屋さんからは、せいぜい白生地の反物を仕入れるくらいが関の山。

そやさかい、爺ちゃんの仕事は、お客さん回りだけでない。いろんな職人さんの所へ行って、お客さんの希望を違いなく打合せすることも大事なことになるんや。自転車に乗って回し歩きとでもいうんかしら、特に作家さんの絵師さんへは5～6回も、それ以上も行くみたい。おまけに、気を張って盆・暮れのつけ届けやろ。酒好きの先生には、吟醸米で造ったりした何かの特別なお酒を持って行くやろ。時には、仕事を兼ねてと茶屋街の女の人の着付けを見に、先生と一緒にチントンシャンやろ。

商売をするっちゅうことは、こんなにもあっちこっちと気配りをせなならんものかと、横で見ていて感心させられるやら、あきれるやら。でも、人ごとだと済ませられものでない。そのまま、私の処にもお鉢が回って来る。

職人さんから、問い合せがあったりすると、私一人の時はもう大変。なにしろ、やり直しの効かないことだけに気を張る。

お客さんからも、「あの着物はどのへんまで仕上ってる？」なんて聞かれると、すぐ職人さんの所へ問い合せたり。自分の思っている職人さんの所まで仕事が進んでいればまだしも。とっくに紋書きが出来てるはずなのに、まだ下絵が上ってなかったりすると大慌て。

こんな苦勞が、着物一枚につき3ヶ月から丁寧なもので半年はかかる。なに

しろ、白生地の仮縫いから始まり。絵描き。それにしたって下絵に、のり引きに、色ざしに、中埋めに、地色の染めに、色止めの湯のしに、友禅流しに、乾かしに、縮んだ生地の中出しに……。それから紋書き。模様師の仕上げ。場合によっては刺繍。やっと最後に仕立て縫いがある。



勿論、お客さんからのお金はそれから。けど、下職人さんは、自分の分の仕事はキチンとしたとたん、すぐにお金を取りに来る。中には先払いを求めて来る職人さんもいた。良い仕事をしてもらうためには仕方がないことか.....と、思いながらも、割に合わないと感じるのは私だけかしら。

ともかく、見た目以上に一枚の着物に拘わる人の多さ、爺ちゃんの忙しさを見ていると、一日の過ぎるのもあつという間というのが本当のところ。そしてこそ、私は店先では暇で暇で仕方がないような素振りをつけて.....



回り持ちの謡の稽古

“おやま”の町いうたら、やっぱり前田のお殿様のお膝元。下手な天下人でイサル(自慢する)どこぞのお殿様の町よりも、ずっと見栄えがするとか。何というても、町に人を集めて賑わいを出すことが一番肝心とばかり、私等商売人を信頼してくれ、商い易いようにしてくれたのだから。

尾張町が栄えて来たのも、最初にお殿様の生まれ育った名古屋の荒子の地から商売人を連れて来て以来のこと。自分が一番に信頼出来る者を、お城に近い所に住まわせて応援してくれたからこそ栄えたとか。そやさかい、尾張町に店を構えることは、それだけ店としての格式もあるけど、信頼されていることになる。

商いをするからには、やっぱり尾張町まで出てこそ本物の信用を勝ち得たことになる。日本海側で一番賑わっている所に店を張ったら、そりゃお殿様の心

粋(いき)を感じて、粋(すい)な芸事くらいはたしなまないと。そんなことも出来んような商人は、この町では爪弾きに合ってしまう。だって、お客さんのことを思えば、売り買いの理屈だけでは通るもんでない。芸事のひとつくらいを習ってこそ、お互いの気持を通い合わせることが出来る。

習い事いうたら、お茶やろ、お香やろ、お花やろ、清元に踊りやろ。そうして何んといっても、ここらはやっぱり“加賀宝生”と言われる所。特別に偉そうにいわんでも、誰もが宝生流の謡の一つくらい口ずさむ土地柄。爺ちゃんも、20歳の頃からお師匠さんの所へ通ってたしなんでいたわね。自分で店を持つようになってからは、稽古場を各店を持ち回りにして続けていた。

他のお店で稽古をするときは、ただ送り出すだけ。順番が巡って来て、この店でするときも、それほどでもなかったね。お師匠さんの席、あそこの旦那さんの席、こっちの旦那さんの席……最後に爺ちゃんの席。と、いう具合に用意し、そっとお茶などを横に置くだけ。お客さんとして来られるのでなく、何んといっても稽古やさかい、あんまりお世話し過ぎるのも考えもの。気を張るのはお師匠さんだけ。私は、奥に引っ込んでいればいだけやった。

「では、今日は鞍馬天狗をしましょうか」漏れ聞こえる声がすると……。お師匠さんが一節を「花咲かば～告げェんとォいひ～し山里～の～」と、謡うのに続いて、皆が一斉に「花咲かば～」と謡うのが響いて来る。

およそ1時間もすると、一段落。それから、お茶を飲みながらの謡談義かしら。この前の宴席で、どこそこの旦那さんが羅生門の「伴なひ語らふ諸人に～」を謡ったのがどうかこうとか。今度、呼ばれている結婚式で何を謡おうとか。

もう、晴れ着の披露が結婚式のこともよくあって、順番に謡をする時に一人だけ謡えなんたら恥やとばかり。だいたい、皆んなが皆んな、謡えて当然と思うとるんやから。その辺の技量がどんなもんか、詳しいことは私には分らんけども。

結婚式が始まると、それこそ最初に強吟の祝言謡「高砂や～この裏船～に帆を上げ～て～」とやり出す。と、引き続いて次の人が弱吟の調子の謡曲で「月宮

殿の〜オ白衣のた〜も〜と〜」と、いう具合。さらにまた控えている人が、別の曲を謡い出すという具合に、なかなか終りそうもない。男は良いけれど、昔も今も、花嫁の気疲れは大変なものやろう。

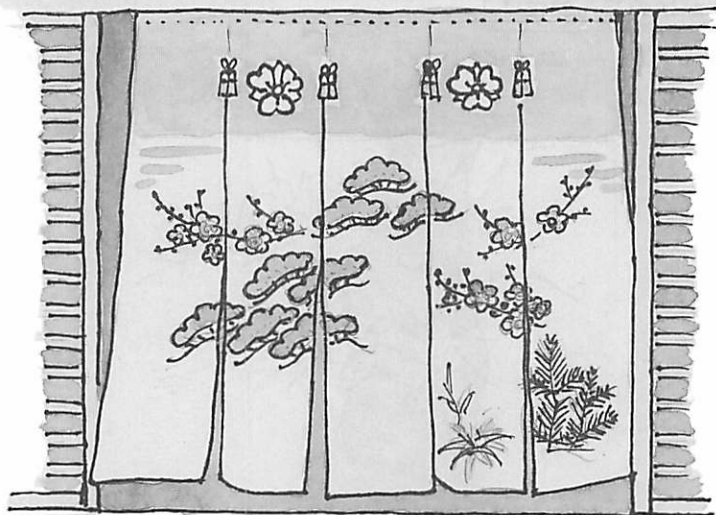
泊まりがけの婚礼着付け



年に1回あるか無しやったけど、上得意のお客さんの娘さんの婚礼がままとすると、そりゃ大変なもの。婚礼簞笥に入れて行く着物だけでも、訪問着に色留袖、黒留袖、喪服、付け下げに小紋に大島にと、ざっと30枚ほどにはなる。それに“道具見”といって、嫁ぎ先での簞笥の引き出しを開けて披露される風習があるもので、どうしても張り込んだ良いものになり勝ち。

婚礼当日は当日で、白無垢の打ち掛けで生家を出発。婚家の玄関では、合わせ水をして入る。江戸の頃は、近所の人が小石を投げつけることもあったそうやけど、遠い昔のこと。それでも、座敷には“花嫁のれん”が掛けられていて、

最初で最後に花嫁がたった一度だけくぐるものに、雅びやかな友禅染の贅を尽くす。仏壇参りが済むと、次は挙式。



三三九度の盃の時には、もう色打ち掛けに着替える。無事、式も終ると、それからは振り袖姿の花嫁をひな壇にして、一晩中続くかと思うような披露宴の始まり。勿論、出だしは宝生流の謡から。

「四海波静かにて～、国ィ～も治まる時津風～」と、定石で始まらないと済まない。

広間には、一流の料亭からの仕出し料理が並び、茶屋街の芸妓さんが踊りやら鳴り物を披露したり、お酌をして回る。花嫁のお色直しに座が静かになると、加賀漫才あり、清元あり……。芸人も参列して、座を盛り上げるけれど、来賓のお客さん自身がいろんな芸を持っているから、我も我もと出し物に困ることはないほど賑わい、延々と夜遅くまで続く。

こうしたこと全て、昔は結婚式場でなく自宅で行ったので、爺ちゃんがついて行って、控えの間で次々と花嫁の着付けを手伝ったもの。それこそ、髪結いさんへまでついて行って着付けをするんやから。何にしろ、婚礼の派手さ丁寧さでは日本で指折り数える土地柄やさかい、着物の枚数にしても半端やない。気ぜわしい花嫁さんやその親御さんにしたって、式の前までならいざ知らず。当日になってしまうと、頭の中はもうワヤクチャ。どれがどの時の着物か、すぐには分らんようになるし、また実際に枚数が多いから、すぐには見つけられんのも無理はない。今時のように、美容院かなんかで手早く済ます程、簡略化されてなかったから。どうしても、着物の専門の知識を持ってないと勤まらなかったんやろね。

私等が横に居て、はい今度はこちらの着物にお召し替えですよ。と、言って着せ替え人形のように手早くお手伝いする内に、花嫁さんが蝶々のように次々と変化(へんげ)する。きっと女の私なんかがついて行ったら、その美しさにぼ〜っと見つめてばかりで、「これっ、何をしとるっ」と、爺ちゃんに叱られたことやろう。

大きな風呂敷にいくつも持って着た着物を、惜しみ無く広げては花嫁に着せ、袖を通した着物はたたみ。もう何回もする。それでも、まだ広げてない着物は残って、終いには着付け疲れするそうや。

昭和劇場と夕方の店先の縁台

東京オリンピックの前頃までは、テレビもそんなになくて映画館が楽しみの一つやった。尾張町の昭和劇場なんかも、満員御礼の札が表に掛かることもあるくらい。浅野川寄りにも映画館があったし、まだ芝居小屋も残っていたさかい、夜になっても町はまだ騒ついていた。

夏の暑い盛りには、昭和劇場で納涼売出しの抽選券がもらえ、最後まで見てからやっと当選券が発表されてた。爺ちゃんなんか、それで一斗樽の醤油を当ててしまったほど。

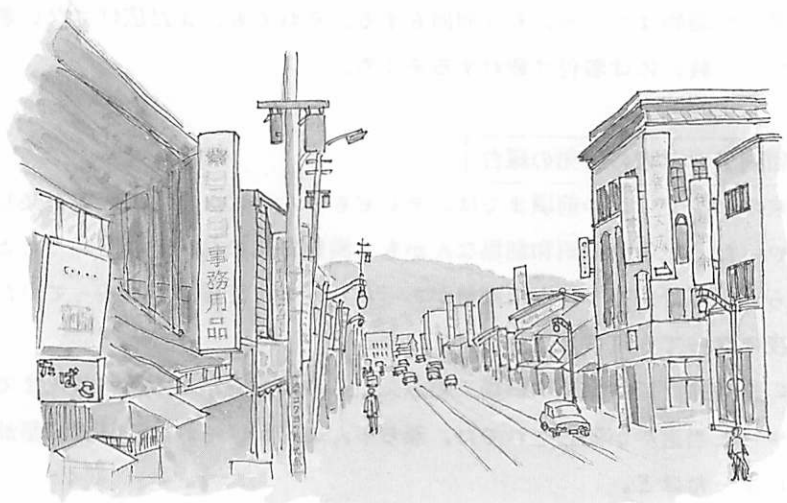
いつも忙しい忙しいと口を付いて出るのに、よく、まあ、ゆっくり映画なん

て見てられるわね。私の目付きだけで思うてることが分るんか、エヘンツと咳ばらい。

「まあ、何んだな。お客さんが、今どんなことに興味を持ってるか。洋服もだんだん着られるようになってるけど、やっぱり着物はまだまだ着られとるし。どんな柄が東京なんかで流行っているか、俳優さんの着ている物が一番分るもんな。うん。」

何やら、独り語とともに、言い訳ともつかんような。男さんて、幾つになっても可愛いところがあるみたい。

ゾロゾロと終演の映画が済んで出て来る人を見ていると、決まって浴衣(ゆかた)姿。半分以上は着ていたかしら。見ているだけで涼しそうで、夏の風情が感じられるようやった。やっぱり、洋服いうたら何んやらヨソヨソしくて、思いのほか足もとがスウスウするようで馴染めない気がするの古い人間なんかね。



表通りから一本入った横町のこの店の前にも、尾張町通りから涼しい風が吹く。ちょっと頬のほてりを冷やそうとするんか、この横町にも人波のおすそ分けが流れて来る。ちょうど、“お福分け”のようにして。この風は、お城の前の大手堀から吹いて来るんかしら。

素足のままでヒンヤリした下駄を履いていると、本当に気持がいい。下駄屋さんも、すぐの角で店を開いているさかい、便利でこの上ない。そういえば、足袋(たび)も大きな問屋さんが尾張町通りで店を構えているし、町を一回りするとだいたいのは揃えられたもんや。

今のようにクーラーがあるわけなし、爺ちゃんなんか店先に縁台を出して浴衣姿で涼み、道行く人に誰彼れ構わず話しかけたりしてる。そんな恥ずかしいことを。と、思っただけをみると、何んのことはない、どこの店でも同んなじようにして涼んでいる。中には、将棋だけでなく、お座敷でしかしないと云われる囲碁もなんのその、お構いなしに縁台に出して来て熱中して指し出し、それをまた道行く人が眺めて。

「ほら、そこに金を打って。角を下げて。」

「あーっ、そんな相手の碁石のすぐ横に打つような石垣碁をせんで、もっと先を読まないかんがな。ほら、ほら、あっちに打って。」

どっちが、誰がしているんやろ。見るだけであき足らんと、皆んなで寄って多寡って、あれこれと下手な横やりを入れている。している方も、

「なにになに、ほんなら次は....」

と、聞いてみたり。何やら、どこまでが家ん中か、外なのか、終いには訳が分らんようになる。

尾張町の子はやっぱり商売人

次男の幼友達の一人に、尾張町の商売屋さんの子供がいて、よく一緒に学校へ通ったり、家にも遊びに来ていた。傍から見ている限りでは、ごく普通の真面目な子のように見えた。

商売を始めて自分の店を持たた私等にとっては、せっかく築き上げたこの身代を引き継いでくれる者がおってこそその張り合い。幸いなことに長男、次男と二人も男に恵まれたことに感謝の毎日。子供の小さい頃から、長男には跡取りとしての思いを持って、高校を卒業したなりから東京へ修業に行かせるつもりにしていた。行く行くは、この店を継いでもらう長男には、たっぷりと商売人としての実務と経験が一番大事なこと。学問というのは、知識を増やしても、知恵を働かすのとはまた別のことやさかい。商売人にとって大事な“知恵”を蔑ろにして、学問をして理屈ばかりを言う人間にはなっていて欲しくなかったこともあるし。

と、考える一方、次男には何んにも分けてあげるものもないのも事実。せめて、学問をして、良い学校を出て、良い会社へ勤められるようにしてあげよう。学力があって、次男がその気で大学へ行きたいなら、精一杯の後押しをするのが親としての勤め。

まずは、一所懸命にこの場所で頑張っていて、子供達の将来のために少しでも手助け出来るようなものを残そう。と、思うのが第一の毎日やった。子供の友達が、人様に迷惑を掛けるようなよっぼどの悪い仲間でない限り、そんなに気にするものでもないし。

ところが、ある時、何んの気なしにその子に

「大きくなったらどうするの」

と、聞いて見たら.....即座に、

「僕は、大きくなったら家の商売を継ぐんだ」

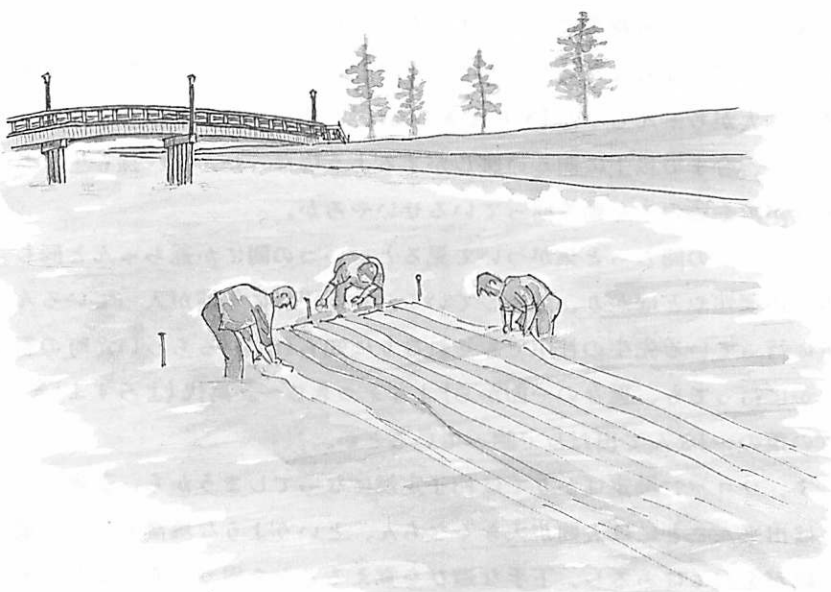
と、ハッキリと言い切るのには驚かされた。まだ小学校の低学年のあんな小さいのに、そりゃいくら親が言い聞かせるようにしていても、あそこまでのことは強制されて言えるもんでない。自分から、そんな気持を持ってこそ言えるもの。長年に渡る商売屋の家の中の雰囲気そのものが、商売を継ごうという気持を育ませるのかしら。下手すると、回りの期待が大きすぎて、逆に気持が押し潰されてしまうことだってあるのに。やっぱり、尾張町の大通りで商売をしている店の子供は違う！

何か、商売をするというんは、ただ単にお金を儲けることとか、人様のお役に立つためとかだけでなく、言葉で言い現す以上に大きくて貴いものを受け継いで行くような。“ころ”の連なりとでも言うんかしら。

他人様の子供の言葉にハッ！とさせられながらも、私等も商売をしていることの嬉しさを感じたのを覚えてる。

のれんの印を子供に託して

どうしたんかしらね、近ごろの若い人達は。私等にしてみれば、まずお客様というか人様のことを第1に考えるのが当たり前やった気がする。回りの人が喜んでくれることが、自分の喜びやったし、生きていることの張りやったし。お店を続けて行くのも、そうした人様の福をご相伴させてもろうためやったみたいな処があった。



グチかも知れんけど、自分のやりたいことばっかしが先に立ってしもうて、人様のことなんかこれっぽっちも考えん人が多くなって来たのも、世の中が変わったせいなんかね。もう私等は古い人間になってしもうて、口を出さん方が良いのかも知れん。

けど、こころの奥底では、“見える形がどんなに変わっても、こころの中には変わらんものがあるはず”と、信じたい。その場その場でのうて、休まずにじっくりと時間を掛けて来たものには、何かがあるはず。

爺ちゃんが奉公先からお暇をもらうて初めて自分の力だけで商売を始めようとした時にも、その辺のことはよく傍の人達から言われてたみたい。

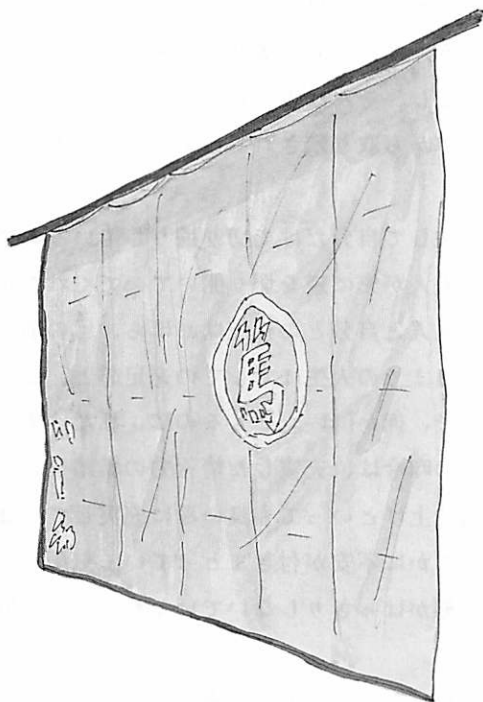
お陰で私にまで「商いは、飽きずに続けることが大事なんや」と、耳に蟬が出来る程に聞かされて来たけど、これからも飽きずに続けて行ってもらうこともまた大事なこと。そやないと、何のために頑張って来たんか意味のないことになってしまう。まして、二人で作ったこの店は、どんな時代になってもやっぱり息子に継いでもらわな、寂しいことになってしまう。

長男は早くから修業に出してあったのが良かったんか、自分のことばかり考える人間にならんかったようで、ほっとしている。いいお嫁さんをもろうて、若い二人がちゃんちゃん(きちんきちん)と、店の仕事を手伝うようになったし。何より、今まで以上に明るい感じがするようになったんは、孫も生まれて若い人間が家や店の中を動き回っているせいやろか。

でも、この間ちょっと気がついて見ると、いつの間にか爺ちゃんと同じように、男の甲斐性やとばかり、謡をしている。もう相当に年期が入っているんか、稽古に行っている先生の社中でもそれなりに知られているらしい。町の新年会なんかに行っても、狸々の一節から「よもオつきじ〜。萬代(よろずよ)までエのオ竹の葉の〜」なんて出だしで謡っているとか。

ま、ソロバン勘定ばかりでは杓子定規になってしまうから、芸事の一つや二つは出来んことには人間が大きくならん、というような風潮を当たり前とする伝統が金沢にはあるし。下手な遊びを覚えることを思うたら、まだしもいいことやと考えとる。

いつの間にか、子供扱いしてるのは私だけで、長男は立派な大人やし、この店の旦那さんになってる。爺ちゃんも私も、ご隠居さんなんやった。のれんの印も背負ってくれているし、後は私等が行き着いたところから、もっともっと先へ進んで行って欲しい。



石田たまき・嬸(おうな)について

明治四十四年六月十三日生。昭和十二年、ようやく一人立ちして店を構えたばかりの石田呉服店に嫁ぐも、上海事変で夫はすぐ兵役に。じっと店を守り、除隊後は外回りの商いで留守勝ちな夫に代わって店先に出て、今日の基盤を築く。

あとがき

お年寄りの居る家。あるいは、お年寄りが周囲に居る環境とでもいうのでしょうか。そんな処で育ち、お年寄りの振舞いを見ていると、物事を結果だけで判断するのでなく、なぜそうなったのか！ という過程を見詰めることを覚えさせられる機会が多いといいます。何と云っても、目の前にそれぞれの理屈を超えた、人生の長い体験者がいるのですから。勿論、全部が全部そうだとはいえられませんし、お年寄りがいなくなっただけで分る人には。

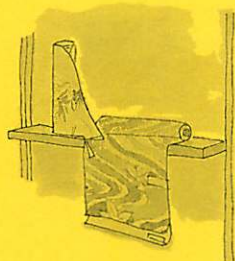
要は、俺が！私！ と言って自分だけを好き勝手に考える時、回りにお年寄りがいるだけで、もう一度考え直す雰囲気があるようなのです。

今は、昔と違っているし、そんな古いことを引きずっている人を相手にしていると、自分まで世の中から取り残されてしまう。と考えるのは、たやすいことです。

けれど、世の中は、決して自分だけで切り盛りしているのではない。深く長い人生を過ごして来た先人が先に道を切り開いてくれたからこそ、今の快適さがあるんだ。その先人と自分との接点は、ほら、目の前にいるお年寄りなんだ。と考えると、これまでの人生に対しての充足感と、これからに向けての指針が与えられたようで、何か「ほっ」とするのは、私だけでしょうか。

マルチメディア時代の昨今は、充実した情報力の素晴らしさと、合理的な快適さでは、20世紀の総仕上げといっても良い程に充実しています。でも、何故か知らないけれど、どこかに不安が付きまとっている気配がします。確かに、“不安”とは、その実態がはっきりしないでいるからこそ不安なのだとの、哲学的解釈もあります。

尾張町小冊子を書き続けながら、歴史の事柄だけでなく、“町の歴史を生きて来た” 古老の話を聞いていると、商いをし続けていることの意味も含めて、“ところ”の大切さが伝わって来るようです。もしかしたら、これが金沢に続いている伝統とでもいうのでしょうか。いわば、安心を教えてくれる実感を、じ〜っと肌で感じられるのです。



《《 さし絵の説明 》》

項	目	内 容
○ 表紙		「○に篤字入りののれん」
<目次>		
○ 尾山神社の前を通るたびにお参りして		「尾山神社の山門」
○ 界限のごひいきで尾張町に店を		「ケツカイで囲んだ仕事机」
○ 顔でゆったり、心はワヤクチャ		「店と奥の仕切りのれん」
○ お客さんの喜ぶ顔のために		「反物を積み上げてる」
○ 下職人さんを回る爺ちゃんの姿に		「下絵(のり置き)を描いている」 「色ざしをしている」
○ 泊まりがけの婚礼着付け		「花嫁姿」 「花嫁のれん」
○ 昭和劇場と夕方の店先の縁台		「尾張町大通りの風景」
○ のれんの印を子供に託して		「友禅流し」

発 行 = 1996年4月吉日

著 者 = 石野 琇一

さし絵 = 村上 隆

発行所 = 金沢市尾張町1丁目11番8号

尾張町商店街振興組合

尾張町若手会